

- 2012/11/30 ゴミのネパール
- 2012/11/29 伝統的性文化健在、キルティプール付近
- 2012/11/28 信号機、ほぼ全滅(4)：カランキ交差点(付：タタの威厳)
- 2012/11/27 カトマンズ盆地の戸建住宅と高層住宅
- 2012/11/26 「白亜のゴンパ」と花のイチャング
- 2012/11/24 コカナとブンガマティ
- 2012/11/23 キルティプールのガート：自然に包まれて
- 2012/11/21 信号機、ほぼ全滅(3)：「日本に学べ」
- 2012/11/21 信号機、ほぼ全滅(2)：タパタリ交差点ほか
- 2012/11/20 桜満開の校庭で糶干し：パンガ
- 2012/11/19 寒くて暖かいキルティプール
- 2012/11/17 煉瓦と桜のキルティプール
- 2012/11/16 農業現代化と動植物の権利
- 2102/11/15 ハシシ1トン、中国へ
- 2012/11/15 キルティプールのティハール
- 2012/11/14 ティハール夜景
- 2012/11/13 肉体文学としての「ハシシタ 奴の本性」
- 2012/11/12 ゴビンダ冤罪批判、カトマンズポスト社説
- 2012/11/12 軍事化の兆し、日ネ関係
- 2012/11/10 深夜 100M 移動、奇跡の家
- 2012/11/09 ルンビニ開発、了解覚書に署名・成立
- 2012/11/08 チョバールの丘*：古き良き農村
- 2012/11/07 信号機、ほぼ全滅(1)：アメリカンクラブ前
- 2012/11/06 米作と手織り絨毯
- 2012/11/05 伝統農法と電力の自給自足：シュールなネパール
- 2012/11/04 民族紛争、宗教紛争へ転化か？
- 2012/11/03 中央法学図書館の選書センス
- 2012/11/02 本格予算案、政府が強行準備

ゴミのネパール

ネパールのゴミ問題はさんざん議論されてきたが、改善どころか、悪化する一方だ。カトマンズもひどいが、むしろ郊外や村の方が悲惨だ。ネパールへは、ゴミ見学に行く覚悟なくして、旅行はできない。ヒマラヤや寺院より先に、まずゴミだ。

ネパールのゴミ問題は、廃棄物の質の変化によるところが大きい。かつてのゴミは、丹後のわが村でもそうだったが、大部分が自然素材であり、空き地や川に投棄しても、しばらくすると自然に分解され、土に戻った。むしろゴミ捨て場の方が土地が肥えていて植物はよく育ち、またミズもたくさんいたので、魚釣り用のミズはたいていゴミ捨て場で採っていたものだ。だからネパールでも、投棄物が自然素材である限り、ゴミはたいてい問題にはならなかった。

ところが近代化とともに、いつまでも分解しない人造物が激増し、ネパールのゴミ問題は一気に深刻化した。とにかくゴミ、ゴミ、ゴミ。ヒマラヤも寺院も、街も村もゴミだらけ。

2

特にかわいそうなのが、聖牛。いたるところでビニール・ゴミを食べている。あの聖牛たちはどうなるのだろう。天寿を全うするとは、どうてい思えない。聖牛にビニール・ゴミを食わせるとは、なんたるバチ当たり。いずれ天罰が下るに違いない。

3

とにかくネパールには、悪臭ただようなか、腐敗物とともにビニール袋を食べる悲惨な聖牛を見ても失神しない強心臓の人以外は、来るべきではない。あるいは、ゴミの山を前景にヒマラヤを望み、ビニール・ゴミをかき分け花々を愛で、ゴミとともに神仏に祈る——そう達観した人だけが、ネパールを存分に楽しむことができる。さすが仏陀生誕地、まるで沼の蓮花のような国ではないか。



■キルティプール西方峡谷のゴミ



■バルクー川のゴミと聖牛(1)／同左(2)



■カランキのゴミ(1)／同左(2)



■バグマティ河原のゴミと高層住宅／バグマティ河原のゴミとカラス

谷川昌幸(C)

2012/11/30 19:09

カテゴリー: [社会](#), [経済](#)

タグ: [ゴミ](#), [環境](#), [聖牛](#)

[伝統的性文化健在、キルティプール付近](#)

1. 伝統的性文化

ネパールは、いうまでもなく性の天国。かつては、カトマンズ盆地のどこに行っても、男根や女陰や男女合体像など、性が氾濫していた。歩けば男根につまづき、女陰にはまるといった有様。

民俗学的には様々な説明が可能だろうが、要するに、家族子孫の繁栄と、家畜や五穀の豊穡を願う、健康でマジメなものであったことはいうまでもない。



■チョパール山麓路傍の男根(リング)

2. 原罪処罰としての性:キリスト教

ところが、性を原罪への処罰と信じ込まされている西洋キリスト教徒の多くは、そのような健康な見方をすることができない。淫らだとか、猥褻だとか、不道德だとか、野蛮だとか——要するに、抑圧され歪になった、イジけた思い込みにとりつかれているのだ。

キリスト教は、何とも罪つくりな宗教である。というか、見方によれば、キリスト教は罪をつくることによって成立し、罪の脅しによって存立している宗教だといっても過言ではない(異端説ではあろうが)。

キリスト教にとって、性器はイチジクの葉で隠さなければならないほど恥ずかしい身体の一部だし、性行為は原罪への処罰だから、それらを彫刻や絵画で開けっぴろげに開陳し礼拝することなど想像もできないことだ。彼らにとって、それらは、せいぜい必要悪、したがって蔽に隠されてあらねばなぬものなのである。

3. 性抑圧西洋文化の影

この性抑圧西洋文化が、ネパールにも暗い影を落とし始めたように見える。かつていたるところにあった男根や女陰や男女合体像の中には、意図的か偶然かはわからないが、壊れたり、ゴミためとなってしまったりしているものも少なくない。

あるいは、旧王宮など、いたるところの寺にあったリアルな男女性器や男女合体像の彫刻は、多くが放置され、もはや原型が見分けられないほど劣化してしまっている。

あるいはまた、タメル入口の寺のように、最近修理されはしたものの、以前のようなリアルな性表現ではなく、肝心の部分がぼかされているものが多い。キリスト教的西洋道徳による直接的あるいは間接的な検閲ではないかと疑われる。

そもそも見たくない人は、来なければよいのだ。頼みもしないのに押しかけて来て、やれ未開で不道德だの、淫らだのと勝手なことをいい、伝統文化を自分好みに改変してしまう。見たくないければ、動物供儀にも性礼拝の場にも来るべきではない。

4. 村の健康な性文化

と、そんな嘆かわしい今日この頃だが、わがキルティプール付近の村は頑張っている。先日、キルティプールとチョバールの丘の谷間を流れる小川のほとりに行ったら、その小さな寺院を修理していた。修理費寄進者一覧らしきものが掲げられ、その横の部屋では男性たちが屋根支柱の彫刻、下の庭では女性たちがレンガ粉づくり(?)をしていた。村総出の修理であろう。

そうして修理された新しい屋根支柱を見上げると、実に見事、古き良き時代と全く同様の、リアルな男女性器や男女合体像が浮き彫りにされている。日本だと猥褻物陳列罪は間違いない。つまり、この近辺の人々は、テレビで西洋墮落番組を見ているはずなのに、文化の基底にある性文化は伝統をそのまま継承しているのだ。

5. 余計なお世話は控えよ

まじめに、敬虔に男女性器や男女合体図像を造っている村人たちに、「そんな未開人のような淫らなことをしてはいけません」などと、知ったかぶりをしていうのは、敬虔な動物供儀を残酷だと非難するのと同様、お門違いの余計なお世話だ。抑圧され歪んでしまったヒガミ根性で、村人たちの健康な願いをぶち壊し不幸の道連れにしてはならない。

「悔い改めよ」——余計なお世話だ！



■ 寺院屋根修理／女性も修理参加



■ 寄進者表とその横の作業部屋／屋根支柱制作



■レンガ粉つくり(?)／新しい屋根支柱(道路側)

[補足]悔い改めるべきはセックス商売

インターネットには、科学偽装男女性器写真([ウィキペディア](#)など)や、祈りなき即物的性行為動画がいくらでもあるが、それらは似てまったく非なるもの。悔い改めるべきは、西洋発・日本発のそうした神をないがしろにするセックス商売である。

谷川昌幸(C)

2012/11/29 12:45

カテゴリ: [宗教](#), [文化](#)

タグ: [キリスト教](#), [セックス](#), [ポルノ](#), [リング](#), [男根](#), [偽装科学](#), [動物愛護](#), [原罪](#), [女陰](#), [性](#), [性器](#), [民俗学](#)

信号機、ほぼ全滅(4):カランキ交差点(付:タタの威厳)

11月25日、キルティプールの西の対岸の新興住宅を見たあと、バルクー川沿いを歩いてカランキ交差点の見学に行った。

カランキ交差点は、幹線道路の大きな交差点。一方のリングロードは、ネパール基準で片道3~4車線、他方のカトマンズ市内カリマティ方面とタンコット・ポカラ方面とを結ぶ道路が片側2~3車線。日本援助のシンズリ道路が完成し、通行量が減ったとはいえ、主要道路の大交差点であることに変わりはない。

この交差点にも、どこかの援助(日本?)で信号機が設置されていた。当然だろう。ところが、行ってみると、信号機は跡形もなく消えている。そして、その代わり、歩行者用陸橋と陸橋の足を利用したロータリーが設置されていた。いたく感動し、2時間あまり、観察していた。

ロータリーには、交通警察が一人いて、交通整理をしている。しかし、ここを通過するトラック、バス、乗用車、タクシー、耕耘機、バイク、犬(牛は道端で寝ころんでいた)はすべて、基本的には、相互の動きを見ながら自主的に判断し通行しているのだ。見事というほかない。

この交差点の設計・施工は、絶対、日本ではない。日本はこんな交差点は絶対に造らない。杓子定規というか、どうしても日本基準に合わせてしまう。かつて長崎の離島に行ったら感動したことがある。狭い島で、港の反対側の海岸沿いは車はあまり通らず、歩行者もほとんどいないのに、なんと、両側にガードレール付きの立派な歩道が造られていた。タヌキ用歩道? これが日本式だ。

カランキ交差点は、明らかにネパール交通文化にあわせて設計され、建設されている。だから、ちゃんと機能しているのだ。

そのかわり、造りは、きわめてチャチだ。いつ壊れても、いつ壊してもよいようにつくられている。歩道橋の上は薄い鉄板敷きでガタガタだし、コンクリート部分もせんべいのように薄い。手抜きは見え見えだ。そのくせ、歩道橋の下の空き空間は、寸分の余地なく商売用に利用されている。お見事! これがネパール式なのだ。

再び繰り返すが、いつかはわからないが、ネパールでもロータリーでは対応できないときがある。信号機が設置され、警官がいなくても、信号(規則=法)に従い交通整理が行われるようになったとき、ネパール社会は大きく変わっているだろう。



■カランキ交差点北西側／交差点北東側



■タタをも恐れぬ歩行者／歩道橋と商店



■交差点横の子牛／消灯信号機と歩行者(バスターミナル前)

【付録】タタの威厳

ネパールでもっとも威厳のあるものの一つが、タタ・トラックだ。どんな悪路も平気。絶対に壊れず、壊れてもすぐ直せる(ように見える)。インドの威厳の象徴だ。たまに道路横の田んぼに仰向けになっているが、これは実に愛らしい。

タタや、その前を平気で横切る人や牛や犬を見るだけでも、ネパールに来る価値がある。タタ、万歳！



■タタの勇姿(1)／(2)



■タタの勇姿(3)／タタと張り合うスズキ

谷川昌幸(C)

2012/11/28 20:49

カテゴリー: [社会](#), [文化](#)

タグ: [ロータリー](#), [文化適合性](#), [法の支配](#), [人の支配](#), [信号機](#)

[カトマンズ盆地の戸建住宅と高層住宅](#)

1. 戸建住宅

11月25日、キルティプールの西北を散策。仏教ゴンパの下の豪華改築キルティプール病院のところを下って川辺に出ると、左から右まで新興住宅の見事なパノラマが広がる。

カトマンズ、パタン、キルティプールなど、ネワールの古い住宅は中庭を囲むような構造であり、多くの家族がそこに共同で住んでいるが、キルティプールの西の対岸の丘の住宅は、ほぼ同じ構造の小さな戸建て、まるでマッチ箱を斜面のひな壇に並べたかのようだ。壮観といえば壮観、ネパール新興住宅文化を象徴するものの一つである。

仮説としては、新興住宅に移り住む人々は、様々な出自であり、伝統的な形の共同住宅＝共同社会を形成できないからではないか。あるいは、戸建ての方が、しがらみが無く、財産として購入・売却しやすいからかもしれない。いずれにせよ、見知らぬ他人の市場社会には、バラバラのマッチ箱戸建てがよく似合う。



■キルティプール西方の丘の戸建住宅



■キルティプールの丘北方下の戸建住宅

2. 高層住宅

これと対称的で対照的なのが、高層住宅。カトマンズ盆地の各地に、ニョキニョキ林立し始めた。これは現代の集合住宅だが、伝統的な中庭を囲むネワール住宅とは、原理的に異なるようだ。中まで入ったことがないので推測にすぎないが、これらは、多くの場合、居住するにせよ主な目的は投資であり、顔の見えないバラバラの個人や企業を相手にしているのではないか。

個人主義が資本主義をつくるのか、資本主義が個人主義を育てるのか？ おそらく両側面があるのだろう。今後、ネパールは、住居形態の変化により、文化的にも大きく変わっていくのではないだろうか？



■パタンの高層住宅／パタン南方の高層住宅

谷川昌幸(C)

2012/11/27 21:05

カテゴリー: [社会](#), [経済](#), [文化](#)

タグ: [ネワール](#), [近隣関係](#), [共同社会](#), [住環境](#)

[「白亜のゴンパ」と花のイチャング](#)

1. 「白亜のゴンパ」

11月24日、カトマンズ西方の丘の上にある「白亜のゴンパ(Druk Amitabha Mountain)」に行った。街からもよく見える巨大なゴンパであり、いったいどのようなものなのか気になっていた。

キルティプールからタクシーで環状道路のカランキ交差点の先、スワヤンブーの手前を左折、少し登ったところを右折し、イチャングに行く道にはいる。狭いでこぼこの田舎道を少し行き左折すると、「白亜のゴンパ」への登山道路となる

この道路は完全舗装。いったん停車したら再発進できないのではと思うほどの急勾配。タクシーはおんぼろマルチスズキだったが、その急峻な登山道をエンストすることなく登り切った。スズキは、本当にエライ！ どのような悪路でも平気でこなす。頑丈でメンテナンスが楽なのだろう。インド・ネパール向きだ。

2. 城のようなゴンパ

丘の上に出ると、そこには巨大な「白亜のゴンパ」が、周囲を威圧するかのように、そびえ立っていた。チベット仏教のゴンパで、ダライ・ラマ系。

それは、まるで山城。あちこちに出城らしきものもあり、ネパール国軍が攻めてきても、容易に落城はしないだろう。中国人民解放軍であっても、手こずるに違いない。それほどすごいものだ。



■「白亜のゴンパ」と参拝者

3. レジャーランドとしてのゴンパ

「白亜のゴンパ」は、土曜日には一般開放されており、ものすごい数の善男善女が、ヒन्दゥー教徒もマオイストも参詣に訪れていた。

外には巨大大仏と極彩色壁画。本堂内も極彩色で、ご本尊様はピカピカ電飾で飾られている。ワビサビの日本人の趣味には合わないが、これがたいへんな人気、ヒンドゥー教徒やマオイストも畏敬の念を禁じ得ない様子だった。

改宗は、憲法により強要を禁止されているが、極彩色諸仏の偉大を見せて、自発的改宗に導くのはおそらく違憲ではあるまい。

しかしながら、「白亜のゴンパ」は、罰当たり不信心者には、まるで「仏教レジャーランド」のように見える。老人ばかりの日本の寺とは異なり、無数の青年男女がバイクや徒歩で訪れ、デジカメで記念写真を撮りあっている。ここは、いまやネパール最大のパワースポットのひとつといってもよいだろう。「白亜のゴンパ」は、特に青年男女に、現世御利益を恵んでくださっているようだ。



■「白亜のゴンパ」入口



■大仏／極彩色諸仏

4. 花の丘

「白亜のゴンパ」はともかくとして、この周辺は、驚くほど美しい。花いっぱいなのだ。

いたるところマリゴールドだらけ。おそらく出荷用に栽培しているのだろうが、そんな生やさしい数量ではない。とにかく、野山の雑草のごとく、マリゴールドが咲き乱れている。さらに感動的なのが、ラルパテ。ラルパテの赤い花々に埋もれてしまったかのような民家さえあった。

先日行ったコカナやブンガマティも美しかったが、花については、この「白亜のゴンパ」周辺の方がはるかにきれいである。



■ラルパテに囲まれた民家



■マリゴールド・麦・名称不詳の花々／マリゴールドの中の家

5. チャンを出されて

「白亜のゴンパ」を一通り見学したあと、丘の上をさらに西方まで散策した。民家が点々とあり、いかにもネパールの。十分楽しめる。一巡りして「白亜のゴンパ」にもどり、無数の善男善女とともに徒歩で急坂を下った。

途中で、珍しく柿の木のある茶店があったので、立ち寄り、一休みした。店のおやじさんにお茶(チャイ)を頼んだら、ヤカン半分くらいの容器に入った地酒チャンを持ってこられて、大あわて。周囲の善男善女の失笑を買ったが、日本人珍客だから仕方ないといった様子で、牛乳入り紅茶に換えてくれた。ポゴタ(?)2個とあわせ、25 ルピー(23円)。

そこからさらに、躓いたら谷底まで転げ落ちそうな急坂を下り、タクシーで登った舗装道路に出た。



■柿・マリゴールド・ラルパテ／雛番の犬

6. イチャング

イチャングからの道と合流するところまで戻ると、イチャング方面からものすごい数の女性たちが歩いてくる。何事かと警官に尋ねると、今日はイチャング・ナラヤンの祭礼だという。

すでに日が落ちかけていたが、せっかくなので、歩いてイチャング・ナラヤンまで行き、お参りの様子を見物してきた。仏様のあと、ヒンドウーの神々にもお参りしたので、御利益は何倍にもなって返ってくるのではと期待している。

イチャングからは、来た道を引き返し、別の谷への道と合流し道が少し広くなったところでタクシーをひろい、キルティプールに戻った。

この日はほぼ一日中、歩き回ったことになるが、空気も花もきれいで、村にも風情があり、全く疲れなかった。



■イチャング・ナラヤン／花のイチャング

谷川昌幸(C)

2012/11/26 10:34

カテゴリー: [その他](#), [社会](#), [宗教](#), [文化](#)

タグ: [ゴンパ](#), [チベット](#), [Druk Amitabha Mountain](#), [Gyalwang Drukpa](#), [布教](#), [仏教](#)

[コカナとブンガマティ](#)

1. コカナ

11月22日、カトマンズ南方のコカナ、ブンガマティ方面に散策に出かけた。キルティプールからタクシー(マルチスズキ)でバグマティ川沿いに下り、サイブバンジャング付近で橋を渡り、マガルガオンを経て、コカナ着。約30分。

コカナは古い村で、寺院や民家など趣はあるが、想像以上に新しいものが増え、村全体としては、今ひとつ調和がとれない感じがした。犬も文明化されており、裏道に入っても威嚇されない。

ここは、村中よりも周辺の田園風景がよい。丘の上からバグマティ川を挟んで向かいの山まで、広く一望できる。谷底の水田に点在する家々が、何ともいえない風情を醸し出している。

また、ヒマラヤはランタン、グルカルポリ(?), ガネッシュの他に、マナスルやアンナプルナも見える。北方の小さなお椀のような丘の上にぽつんと木が1本。これがなかなか風情があり、絵になる。ヒマラヤをバックに入れて写真を撮ると、少々、絵になりすぎる嫌いさえある。むろん桜も満開。(以下、写真キャプションの「-K」はコカナ、「-B」はブンガマティ)



■コカナと桜-K / 靱干しと水田遠望-K



■ 粿干L(1)-K / 粿干L(2)-K



■糸繰り-K／丘の木とヒマラヤ(1)-K



■丘の木とヒマラヤ(2)-K

2. ブンガマティ

コカナを堪能したあと、歩いてブンガマティに向かった。細い里道で、車やバイクはほとんど通らず、快適。時々、欧米人の集団と出会う。最近、団体旅行は欧米人、個人旅行は日本人という傾向になってきた。日本はエライ！ ついに欧米を追い抜いた。

ブンガマティは、古い建物がほとんど残っており、ココナ以上に趣がある。町中いたる所で粃干し。まるで粃干し大会のようだ。

また、神仏の彫金や木彫、絨毯の手織りなどは、ココナでもやっていたが、ここでもあちこちでやっている。かなりの需要がありそうだが、宿の主人に聞くと、特に絨毯や布の手織り労働はきつく、賃金はわずかだそうだ。



■ 民家と洗濯物-B



■ 粃干し(3)-B / 粃干し(4)-B



3. 裸体女性の自然

驚いたのが、ブンガマティでは、女性が上半身裸で昼寝や糶干しをしていること。コカナでも見たが、ブンガマティの方が多い。さすがに若い女性ではなく、30代以降の女性たちのように見えた。

しかし、これは驚く方が変だ。西欧は寒いから服を着るのであり、南国は暑いから着ない——ただそれだけ。日本でも、農漁村では、1960年代頃までは、女性も平気で上半身裸で夏を過ごしていた。寒くて服を着ざるをえない西欧人が、その僻目から、衣類で身体を隠すことを文明的、道徳的という説をでっち上げ、暖かい国の人々に押しつけたにすぎない。

幕末、日本を旅した西欧人が、日本人は庭先で平気で行水したり、裸で歩き回っているという、その「未開」「不道徳」を笑いものにしたが、まったくもって余計なお世話！拘束着を文明的、道徳的と思い込み、不自由な生活をしている西欧人の方が変なのだ。

18, 19世紀のコルセットで腰を異様なまでに締め付けた西洋女性と、上半身裸でくつろいでいる東洋女性を比較してみよ。自由で道徳的で高貴なのは、明らかに東洋女性だ。ゴーギャンに聞くまでもない。



■ 寺院広場で沐浴-B / 寺院で野菜干し-B



■ 糶干し(5)-B / マナスルー-B

4. ネクタイで拘束されるネパール人

そこで嘆かわしいのが、東洋人の自尊心自己放棄。クソ暑いタイなどでも、クーラーをかけ、背広にネクタイ。不道德の極みだ。

そして、わがネパール。まったくもって理解しがたいのは、私学が流行し始めると、各学校が競って生徒にネクタイを強制したこと。私の交流校の一つも、20年ほど前の創立時から、1年生から最上級生までの男女生徒にネクタイをさせている。

こちらは半袖、ノーネクタイだというのに、まったくもって西洋の猿まね、自尊心放棄であり、不道德きわまりない。半裸女性の自立自尊に学ぶべきだ。



■脱穀機と粃-K／粃干し(5)-B

5. 資本主義と英語帝国主義の走狗、私学

私学は、コカナ、ブンガマティ付近にも、驚くほどたくさんある。いずれも豪華な建物で、学費も高そうだ。そして、競って校舎に、SLC 優秀者の顔写真付一覧表を掲げている。

大部分の私学が、もちろん洋式正装。おまけに母語使用は厳禁され、一日中、英語で生活させられる。保育園から始める私学もあるから、オーストラリアで厳しく批判された、アボリジニの子供を親から引き離し、白人英語文化で育て、「文明人」にする手法と同じだ。愚劣きわまりない。

こうした金儲け主義私学の生徒は、資本主義と英語帝国主義の奴隷にされた、かわいそうな子供たちだ。彼らには、自由も自律もない。根本的なところで、母語や自文化を軽蔑、放棄させられているからだ。

民族アイデンティティ主義者は、民族別連邦制などくだらないことをいう前に、率先して自分の子供をこの種の私学に通わせることをやめるべきだ。自分の子供を母語と自文化の中で育てる努力を始めるなら、多少は言行一致、西洋迎合の表向きの主張にもある程度の説得力が得られるであろう。

子供を私学に通わせ、英語文化漬けにし、洋行をねらう「文明人」に比べ、ブンガマティの上半身裸で屈託無く昼寝や糶干しをしている女性たちは、はるかに自然で自由だ。彼女らを見て、ゆめゆめ「未開」だの「野蛮」だの「不道德」などと、誤解してはならない。不自由で不道德なのは、拘束着を着ている西洋人や、それ以上に、西洋人の目を持たされてしまった卑屈な日本人自身なのだから。



■ザルとトウモロコシ-B／糶干し(6)-B

6. 文明化しない犬

ブンガマティは、よい村だが、その分、犬も文明化していない。表通りを外れ、少し裏道に入ろうとすると、犬がうなり声を上げ、よそ者「文明人」を威嚇してくる。犬は、感情に素直であり、自然が命じるままに、自分たちの文化にとって危険な墮落した「文明人」を排除しようとするのだ。

これは恐ろしい。犬は本気だ。こういう場合、かつて西洋人は軍隊を派遣し撃ち殺したが、私は平和主義者、犬の守る彼らの聖域には立ち入らないことにした。

というわけで、犬たちに追い返され、やむなくブンガマティ周辺の立ち入った散策はあきらめ、コカナに引き返した。



■窓と花-K/寺院の鐘と糶干し

7. バイセパティ

コカナからは、バス道をパタンに向けて歩いた。車やバイクが多く、面白い道ではない。パタンまで半分くらいきたところのバイセパティであきらめ、タクシーでキルティプールに戻った。



■民家(?)とヒマラヤ(バニヤガオン付

近)

谷川昌幸(C)

2012/11/24 13:36

カテゴリー: [社会](#), [文化](#), [旅行](#)

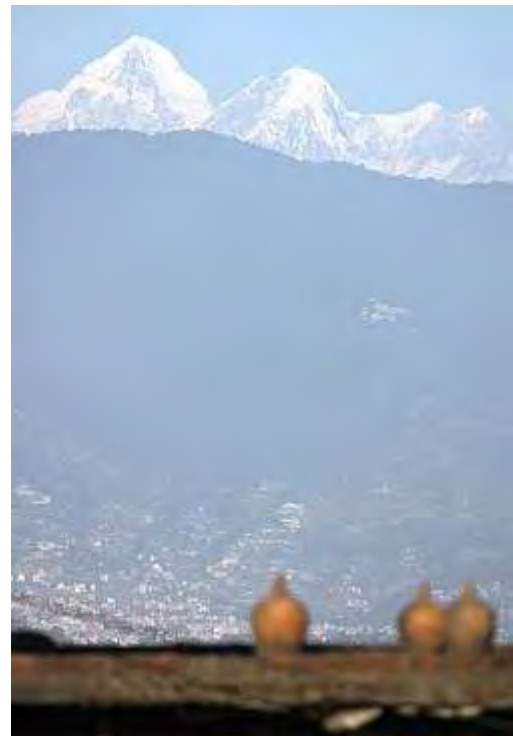
タグ: [コカナ](#), [ブンガマティ](#), [英語帝国主義](#), [衣服](#), [裸体](#), [資本主義](#), [文明](#), [未開](#)

キルティプールのガート: 自然に包まれて

1. 仏教ゴンパと援助ロープウェー残骸オブジェ

11月21日、キルティプールの西方へ散策に出かけた。丘の西北端、インドラヤニのすぐ下に、援助ロープウェーの巨大な残骸があり、それにブーゲンビリアの大木がからみつき、巧まらずして見事なオブジェとなっている。

その左横奥には、大きな美しい仏教ゴンパがある。誰でも入れ、花々が咲き乱れるヒマラヤ展望の名所である。本堂内ではネパール語・英語使用の法話を聴くこともできる。



■インドラヤニからのヒマラヤ／ゴンパからのヒマラヤ



■ロープウェー残骸オブジェ／ガート公園と残骸ロープウェー(上方)

2. ガート公園(仮称)

そのゴンパの隣に小学校があり、その横の小道を下りていくと、谷底の小川の側に小さな寺院インドラヤニ・サムサンがあり、その川岸がどうやらこの付近のガート(火葬場)となっているようだ。一昨日近くを通ったとき葬儀参列者が集まっていたし、今日も30人ほど集まり火葬の準備をしていた。かなりの人が、ここで荼毘に付されるのだろう。

この谷は、キルティプールの丘と西向かいの丘の狭間で、垂直に近い角度で切れ込んでいる。上からのぞくと足がすくむほどだ。キルティプール側は、公園として整備されているらしく、斜面には桜が植えられ、小道も造られ、あちこちに鉄製ベンチが置いてある。

このガート公園(仮称)は放牧が認められているらしく、牛や羊があちこちで草をはんだり、寝そべったりしている。ガート側の小川では、女性たちが洗濯し、洗った布を周辺の草地に広げ干している。その側では子供たちが遊び回り、近くの田では刈り取り・脱穀後の稲藁を広げて干したり束ねて運んだりしている。小春日和の、のどかな田園風景である。

このいつもと変わらない自然な風景の中で、この地方の荼毘は執り行われているようだ。

ネパールの火葬場としては、パシュパティナートが有名だ。寺院は立派だし、川岸の火葬施設も整備されている。しかし、その反面、寺院は制度としてのヒンドゥー教の権威の具現であり、良く言えば荘厳、逆に言えばケバケバしいこけおどし。ここでの葬儀は、死者と縁者のためというよりは、権威と見栄のためのよう思えてならない。



■公園の桜と羊／寺院と葬儀参列者(左上)



■ガートと牛／ガートで洗濯

2. 日本の葬式産業

このことは、日本の葬式について、特に強く感じる。葬式はますます形式化し、寺と業者の商売となり、とんでもない金がかかるようになった。特に悲惨なのが、地方。

いま日本の地方では、高齢化が進み、当然、結婚や誕生は少なく、葬式が多くなる。その結果、驚くべきことに、田舎では、葬儀業者がアンテナを張り巡らせ、誰かが死ぬと、いち早くキャッチし、競って新聞チラシに死亡情報を掲載する。次の顧客——死亡待機者——を獲得するためである。いま田舎の朝は、新聞を広げ、死亡広告チラシを見るのが、日課となっている。

おかげで、田舎の「死の商人」は景気がよい。大きて立派な建物は、有料老人ホームか葬儀催事場と見て、まず間違いない。

私は、こんな葬儀はいやだな。自分の死を寺や僧侶や葬儀社の金儲けの種にされたくない。死は本来自然なものだ。死とともに、自然の中に自然に帰っていくのが理想だ。

3. 死して自然に帰る

自然に帰るという点では、このキルティプール・ガートでの荼毘は理想に近い。伝統社会の葬儀は、一般に多くの儀礼に縛られるから、キルティプールでも死後の儀礼は多数あるであろうが、少なくともこの火葬場での荼毘に限れば、ごく自然だといってよい。参列者の多くは平服であったり、ごく質素な喪服だし、ケバケバしい飾り物があるわけではない。

荼毘そのものを見ていないが、ここでの火葬は、花々が咲き、牛や羊が草をはみ、女たちが洗濯し、子供たちが遊び、農民が稲藁集めをする、その自然な風景の中で、自然に執り行われるものであるに違いない。近親者の悲しみは、遠くからでも、よく感じ取れる。それすらも、自然は優しく受け入れ、自然のうちにいやしてくれているようだ。

私の葬儀も、このような自然に抱き包まれるような、自然なものであることを願っている。



■ 対岸のチョータラとヒマラヤノ峡谷と新興住宅街

谷川昌幸(C)

2012/11/23 15:43

カテゴリー: [社会](#), [文化](#)

タグ: [ガート](#), [キルティプール](#), [火葬](#), [自然](#), [葬儀](#), [死](#)

[信号機、ほぼ全滅\(3\):「日本に学べ」](#)

1. 交通道德向上キャンペーン

ラトナ公園の北東角、バグバザールの西出口の向かいの公園フェンスに、大きな交通道德向上キャンペーン看板が出ている。各地からのバスが集まる交通の中心地であり、よく目立つ。この交差点にも、むろん信号はない。



■ 交差点付近(赤印が看板位置、Google)



■ キャンペーン看板

2. 日本に学べ

私はいそいでいたこともあり、ちょっと見て、この看板は一つのものであり、右側が交通道徳向上キャンペーンのイラスト、左側がその交通道徳を「日本に学べ」と呼びかけるものだ、と勝手に思った。

ところが、ホテルに帰り、写真をよく見ると、右半分には、こう書いてある――

ちょっと待て！

下は車が走っている

上の陸橋を渡れ！

陸橋を渡る＝100%安全
道路を渡る＝100%危険
自分自身で考えよ。さあ、どうする？

そして、左半分は、「STUDY JAPAN(日本を学べ)」ではなく、「STUDY IN JAPAN(日本で学ぶ)」となっている。

つまり、これは、右半分が交通警察署・カトマンズ市役所・JJTWC(NGO)の交通安全キャンペーン、左半分が「ネパール日本セフセンター」という日本留学斡旋業者の宣伝であり、左右は一体ではなく、それぞれが独立しものであったのだ。

笑い話のようだが、これは実話であり、興味深くも恐ろしい体験であった。私の頭の中には、「信号を守る日本人、守らないネパール人」という固定観念があり、看板のキャンペーン・イラストと大文字の JAPAN を見たとたん、「交通道德のお手本としての日本」という図式が反射的に出来上がり、「IN」を見なかったのだ。

いや、正確には、私の目は間違いなく「IN」を見ているはずだが、無意識のうちに右のキャンペーン・イラストと関連づけ、左側を「交通道德を日本で(IN JAPAN)学べ」というメッセージと思い込み、さらにそれが簡略化され「日本を学べ(STUDY JAPAN)」となってしまったのだろう。

私の潜在意識は「STUDY IN JAPAN」の第一の意味(日本留学)を自動的に消去し、状況に適合した先入観に合わせてしまったのだ。われわれはすでに知っていることしか認識しない、とある大哲学者は喝破したが、これはまさにその卑近な実例といえよう。

今回は、写真に撮っていたから、あとで確認し訂正できたが、もしそうでなければ、いまネパールでは「交通道德を日本に学べ」というキャンペーンが行われているという、とんでもない誤解を持ち続けることになってしまっただろう。

これは、あまりにも軽率な事例だが、異文化を見る場合、多かれ少なかれ、同様のことが起こっていると考えるべきであろう。異文化を見る場合、われわれは自分の立場(観点)から見ざるをえない。立場(観点)なしの認識は、不可能だ。いわゆる存在拘束性である。したがって、認識対象は、多かれ少なかれ歪んだ形でしか認識されない。これは異文化理解の常識だが、えてして忘れられがちだ。大きな「IN」があるのに、見て見なかった——苦い教訓である。

3. 「日本で学ぶ」と「日本に学ぶ」

しかし、よく考えてみると、日本留学斡旋業者が交通道德向上キャンペーンのスポン

サーになっているのは、単なる偶然とは思われない。日本留学斡旋業者や一般のネパール人の間に、日本は規則を守る安全な国だ、日本に学べ、という思いがあるからこそ、このキャンペーン看板になったのではないだろうか？

そもそも「日本で学ぶ」のは、多かれ少なかれ、「日本に学ぶ」ことにもなる。日本も「西洋で学ぶ」ことにより、「西洋に学ぶ」努力を続けてきた。あるいはまた、「ネパールで学ぶ」ことにより「ネパールに学ぶ」努力をしている人も少なくあるまい。

とすると、「STUDY IN JAPAN」を「日本に学ぶ」と認識したのは、全くの間違いというわけではなく、あんがい事の深層を直感的に捉えたものということになるかもしれない。少々、弁解がましくはあるが。

谷川昌幸(C)

2012/11/21 23:52

カテゴリー: [社会](#)

タグ: [規則](#), [認識](#), [存在拘束性](#), [客観性](#), [信号](#)

[信号機、ほぼ全滅\(2\): タパタリ交差点ほか](#)

1. タパタリ

11月18日、信号機「定点観測地」の一つ、タパタリ交差点に行ってみた。無惨、悲惨！ 啞然とした。

華々しく点灯したときから、こんな複雑な信号システムは機能しないのではないかと危惧したが、現状は想像以上だ。歩行者用信号はへし曲げられ、車両用信号は看板でランプを隠され、信号ケーブルは至る所で垂れ下がり、すべてが醜悪な残骸と化している。

信号機を維持し使用する意思是寸毫も認められない。早く切り倒して鉄屑にした方がよい。論より証拠、現状は写真で見えていただきたい。



■ 消灯信号と寺院修理／曲がった信号と修理済み寺院



■ 警官の交通整理／広告優先

2. トリプレスワル

世界貿易センター前の信号機は、文字通り切り倒されたのか、一つを除いて信号ランプそのものが全く見あたらない。この交差点は、幸い昔からのロータリーがそのまま残されているので、このロータリーと交通警官の手信号とで交通整理がされている。



■一つだけ残った信号／警官の交通整理

3. マイティガルほか

中央統計局、農業開発銀行、最高裁などの近くのマイティガル交差点も、一つだけ黄点滅だったが、他は消灯。黄の点滅など、ほとんど無意味なので、ここも全滅といってよい。また、シンハダーバー前、ディリーバザール出口など、他の大きな交差点もみな全滅だった。



■曲がった消灯信号(マイティ

ガル)

4. ATM との対比

悲惨、無惨の信号機援助の現状を見ると、援助の文化適合性と必要性を改めて考えざるをえない。

ネパールの人々は好奇心が強く、必要でさえあれば、新しいものを日本人以上に大胆、積極的に取り入れ、使いこなす。その好例が ATM。

ATM は、導入当初は、銃を持った警備員が警戒し、機械もよく故障した。ところが、いまや ATM はいたるところにある。警備員はほとんどいないし、故障もない。残骸信号機のタパタリ付近にもたくさんある。日本以上に便利だ。

つまり ATM は、ネパールの人々が必要としており、かつネパール文化に適合していたから、援助などしなくても自然に広がり、見事に保守管理されているのだ。

携帯電話もそうだ。ネパールの人々が必要とし、文化に適合しているのだから、こちらも自然に普及し、使用されている。カトマンズを見る限り、日本より安価で便利といってもよいであろう。

5. 援助の必要性と文化適合性

ATM や携帯電話と対照的なのが、信号機。おそらく日本をはじめ先進諸国が信号機は近代化に不可欠と考え、大金を援助し設置させたのだろう。

しかし、ネパールは、少なくとも現在まではロータリー文化であり、信号機文化ではない。信号機は文化適合性が無く、人々も必要性を感じてはいない。だから、いくら大金を援助し高機能信号機を設置しても、しばらくすると使用されなくなり、数年もするとガラクタとなり、結局は切り倒され、鉄屑とされてしまうだけなのだ。

むろん、繰り返し留保するように、ネパールでもいずれ信号機が必要とされる時期が来るであろう。しかし、見る限り、まだその状況ではない。信号機ほど、援助における「文化適合性と必要性」の問題を目に見える形で具体的に示してくれるものはない。

ネパール観光やネパール・スタディツアーには、援助信号機見学コースをぜひ追加していただきたい。

谷川昌幸(C)

2012/11/21 00:41

カテゴリー: [社会](#), [文化](#)

タグ: [ロータリー](#), [援助](#), [文化適合性](#), [法の支配](#), [人の支配](#), [信号](#)

桜満開の校庭で糶干し:パンガ

17日もティハール休みの続き。午前、ホテル屋上でヒマラヤ連山を見ながらひなたぼっこ。午後2時頃から丘を下り、パンガ、イエチョー方面に散策に出た。道草をしながら、イエチョーまで40分くらい。

キルティプールのパンガへの岐路のところに電気屋さんがあった。看板はサムスン、そして驚いたことに店頭山積みのテレビはネパール製。ムスタン車ばかりかテレビまでネパールで作るようになったのだ。プラチャンダのルンビニ開発が始まれば、タライ工業地帯製の家電が日本にどっと輸入されるようになるかもしれない。



■ 電気屋さん(キルティプール)

パンガは、キルティプールのすぐ隣、古い家屋が残り、なかなか趣のある村(町)だ。家の戸口に絵付きの大きな瓶が置いてあるのも優雅だ。



■パンガの民家/UMLの年賀宣伝

このパンガの入口に、こんな宣伝が出ているのに気づいた。下はコーラの宣伝、中間にネパール新年(ヒンドゥー教／仏教)広告、上にキリスト教会(福音派?)の呼びかけ。左下には今時のネパール女性、その奥には仏教かヒンドゥーの神像。これは意味深だ。

かつては宣教師が真っ先にやってきたが、資本主義社会になるとコーラが一番乗り、続いてキリスト教という順になる。コーラを飲めばアメリカが恋しくなり、そうなればキリスト教の出番というわけだ。俗に言うコーラ帝国主義。この展開はマオイストが敏感に感じ取り、闘争初期には米帝の先兵コーラの工場を標的にし、いくつかを実際に破壊した。しかし、いまではマオイストが率先してコーラを飲んでいる。ということは、キリスト教導入もマオイスト先導ということになるかもしれない。



■コーラ・ネパール新年・キリスト教

それはともあれ、パンガ村の外れには立派な「ジャナセワ高校」があり、その校庭では近所総出で粃干しをやっていた。桜が校庭の南西角に植えてあり、いままさに満開。上方北にはランタンの高峰。これは壮観だ。



■桜と粃干し(ジャナセワ高校)



■ランタンと糶袋／イエチョー付近の小道とランタン

さらに先に進み、イエチョー付近にくと、チョバルの丘やヒマラヤの山々が別の角度から見えるようになる。平地で、近景に家屋、花、バナナ、人物などが入るので、高度感丘の上よりも格段に大きい。「ヒマラヤは高い」を感じたければ、低い平地に下りるに限る。素人の安物カメラの手持ち撮影でも、この程度の迫力は出せるのだから、やはりヒマラヤはすごい。ただし、こりすぎると絵に描いたような写真になってしまう。

イエチョーには桜もある。農家、牛、秋桜と並ぶと異国情緒たっぷり。こちらも楽しめる。



■ チョバールの丘／農家と牛と桜



■ ランタンとバナナ／グルカルポリとキルティプールの丘

2012/11/20 01:17

カテゴリ: [社会](#), [宗教](#), [文化](#), [旅行](#)

タグ: [キリスト教](#), [コーラ帝国主義](#), [パンガ](#), [桜](#)

寒くて暖かいキルティプール

この時期、北向きの室は寒い。たくさん着込んでもでも寒いので、屋上に上がり、ひなたぼっこをする。

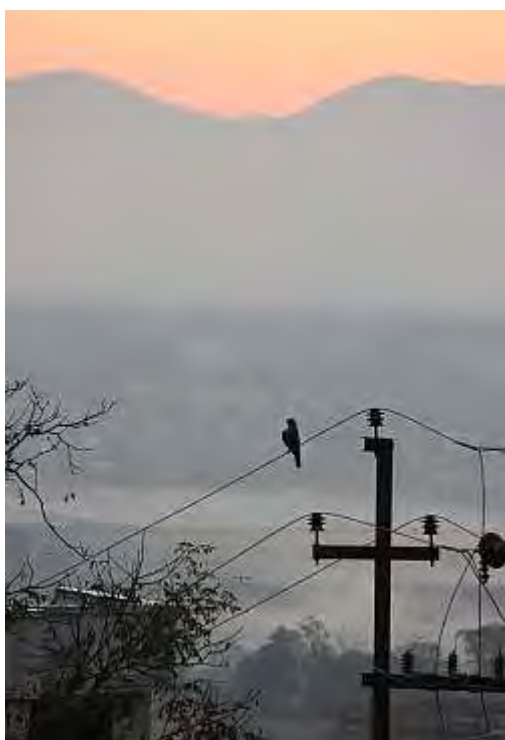
これが快適。ぽかぽか、ついうたた寝を繰り返してしまう。本を持って行っても2、3頁読むとうとうと、これで半日終了。

周囲を見回すと、やはり屋上で椅子に腰掛け、何をするでもなく、じっとしている人が多い。また、田の畦にうつぶせになっている人もいて、行き倒れかと心配するが、実は、これらの人は、ひなたぼっこをしているのだ。

湿度が低く、天然赤外線が身体の深部までホカホカ暖めてくれる。周囲は百花繚乱、中景は有り難いスワヤンブー、そして天空にはヒマラヤ。半日といわず、一日中でも、ひなたぼっこをしていたいくらいだ。

が、そこは勤労倫理を埋め込まれた悲しき近代人、何かをしていないと罪悪感に駆られる。まことにもって、因果なものだ。

■朝夕の風景(ホテルより)





谷川昌幸(C)

2012/11/19 09:31

カテゴリー: [旅行](#)

タグ: [カトマンズ](#), [キルティプール](#), [ヒマラヤ](#)

煉瓦と桜のキルティプール

キルティプール名物には、赤煉瓦と桜もある。日本人観光客には、この二つだけでもキルティプールは見物に値する。

1. 赤煉瓦の伝統と文化

思い込みといわれるとそれまでだが、赤煉瓦には伝統と文化が感じられる。たとえば、同じ本でも、モダンな近現代建築の図書館にあると軽薄な感じがするのに対し、赤煉瓦図書館だと重厚な感じとなる。

キルティプールには、その赤煉瓦が多い。建物ばかりか道路も、たしかに石畳やセメントが増えてはきたが、まだまだ赤煉瓦敷きの部分が多い。この村に伝統と文化、深さと重さが感じられるのは、それ故である。



■煉瓦造りの町キルティプール

煉瓦には、製造所ですら、特有の文化の香りがする。キルティプールの南西郊外には、相当数の煉瓦製造所があり、現在も稼働中だ。

その佇まいが実によい。文化的だ。工場というより工房の趣がある。いずれもかなり大規模な製造所だが、田舎の風景にとけ込み、絵となっている。特に、「秋霞」たなびく菜の花畑と、よくマッチする。



■煉瓦製造所遠景(左)／近景(右)

2. 桜の哀愁

キルティプールは、また桜の名所でもある。丘には少ないが、ちょっと郊外に出ると、

かなり見られる。菜の花が秋に咲き、霞が秋にたなびくように、ここでは桜も秋に咲く（春咲きもあるだろうが）。

11月16日はまだティハール休み。午後、キルティプールの丘を南に下り、ナガウンからバツケパティ方面へ散歩に行った。道草をしながら約30分。この道路は新設らしく、直線のアスファルト。つまり、煉瓦の正反対。伝統も文化も不在で、歩いても疲れるだけだ。

また、道の両側の家も、新しいものが大半で、モルタル塗り。しかも、ピンクや青やら、やたらケバケバしい。ピンクは煉瓦色に近いと思われようが、モルタルのピンクは軽薄、煉瓦の落ち着きとは比較にならない。

というわけで、バツケパティまでは無味乾燥なアスファルト直線道路なのだが、バツケパティのバス停で道路を外れ、山麓方面に向かう田畑の中の小道を少し行くと、山麓に桜が咲いている。野生なのか植えられたものかはわからないが、かなりある。田畑や小道沿いにはマリーゴールド、菜の花、ラルパテ、カンナ、そして名も知らぬ青や白や黄色の花々も満開だ。まさしく百花斉放。

このように、キルティプールの丘や郊外の桜も満開だと華やかではあるが、なぜか一種の悲哀も感じる。とくに、稲刈り風景の中の桜には、哀愁を感じざるをえない。これは日本人特有の感傷なのであろうか？ 地元の人々に尋ねてみたいと思う。



■山麓の桜(左)／道路沿い民家の桜(右)

[追記]古き良きネパール

バツケパティのチョータラの前の茶店で紅茶(ミルクティ)を飲んだら、10 ルピー(9 円)だった。椅子を店の前に持ち出し、ボケーと風景や道行く人々を眺めていたので、チップをおこうとしたが、受け取ってもらえなかった。また、帰りに小型路線バスに乗ると、少年車掌さんがわざわざ席をつくり座らせてくれた。30 分も歩けば、期待通りの「古き良きネパール」を体験することができる。

谷川昌幸(C)

2012/11/17 22:43

カテゴリ: [文化](#), [旅行](#)

タグ: [キルティプール](#), [煉瓦](#), [桜](#)

農業現代化と動植物の権利

11 月 9 日、奇跡の家を見学したついでに、キルティプールの南西の山麓を散策すると、農業の現代化(近代化)が急速に進行していることに驚いた。

これはトマトのビニールハウス栽培。他に、キャベツ、花などもハウス栽培。日本以上にぎっしり密集して植えている。



これは鶏舎。こちらも驚くほど多くの鶏を詰め込み、飼育している。



これは豚舎。やはり過密だ。



ネパールといえば、かつては自然粗放農業。米や野菜は雑草と競争しつつ共生していたし、鶏は庭先や畑を勝手に走り回り、卵を産み、そして肉となっていた。豚も、ビシュヌマティ川の川岸などで放牧されていた。いずれも生産性は低く、農民の生活が苦しかったことは容易に想像がつく。

ところが、写真に見るように、ネパールはその前近代的自然農法から一足飛びに現代的な高度集約農法に大飛躍。大丈夫だろうか？

農業専門家ではなく調査もしていないので推測にすぎないが、野菜にせよ鶏や豚にせよ、ビニールハウスや鶏舎・畜舎にこんなに詰め込めば、化学肥料・人工飼料に頼

らざるをえないだろうし、殺虫剤・殺菌剤も欠かせないだろう。抗生物質やホルモン剤も使用されているかもしれない。

動物や植物にも、自然に生き、自由に育つ「権利」があるはずだ。たしかリンボウ先生の本に出ていたと思うが、イギリスでは豚にも自由と独立を認め、清潔な一戸建て豚舎をそれぞれの豚家族に割り当てているそうだ。

西洋の動物愛護団体は、動物の権利を理由に、水牛や山羊や鶏などの供犠に猛反対しているが、神の前で聖別され首を切り落とされるのと、鶏舎や豚舎に閉じこめられ、抗生物質入り人工飼料や殺菌剤まみれで飼育され、食肉工場で機械的に殺されていくのと、どちらがより残酷かは言うまでもあるまい。動物愛護団体の動物供犠反対の偽善は、惨めなまでに浅薄であり、愚劣だ。

ここで大切なことは、**動植物の権利**を守ることは、**人間の権利**を守ることでもある、ということだ。権利を奪われた不健康な動植物を食べると、当然、人間の健康も保たれない。日本の農村では、化学肥料・農薬まみれの作物は出荷用、自然農法作物は自宅用と、区別して作られている。これは、田舎の常識だ。

ただ、日本や先進諸国の場合、農薬規制がある程度きいており、短期的な被害は目立たない。しかし、ネパールの場合、そのような規制はあまり期待できない。だからこそ、ネパールでは、ヒステリックな偽善的動物供犠反対ではなく、動植物の自然な権利の擁護が、先進国以上に強く主張されなければならないのである。

郊外を散策していると、**近代以前から近代以後への近代抜き飛躍**が、とんでもない無理を引き起こしていることを、いたるところで目にすることができる。



谷川昌幸(C)

2012/11/16 23:35

カテゴリ: [社会](#), [経済](#), [文化](#)

タグ: [現代化](#), [食の安全](#), [農薬](#), [農業](#), [近代化](#), [動物の権利](#), [動物愛護](#)

[ハシシ1トン、中国へ](#)

ネパール麻薬取締局(NDCLEU)は 11 月 2 日、運び屋 3 人を逮捕し、未精製ハシシ 1080kg を押収した。

1トンとは大胆、大きな袋に梱包され山積みされていた。相場は、1kg1万5千ドルと言うから約 1500 万ドル、途方もない大金だ(ちょっと眉唾だが、そう新聞には書いてある)。

密輸先は中国。マクワンプール経由(詳細不明)で運び込む計画。中国では麻薬需要が急増、ネパール製は安価・高品質で好評だという。大金の成功報酬で運び人を集めているらしい。

この方面の知識はほとんど無いが、ハシシはネパールではかつては宗教儀式などで日常的に用いられていた。伝統文化、伝統社会は、ハシシをうまくコントロールし、有用に利用してきたのだ。

ところが、進歩し理性的となったはずの近代社会は、ハシシに限らず、人間の欲望を、本能に近ければ近いほど、コントロールできなくなっている。生存欲、性欲、金銭欲、権力欲など、全体としてみると、伝統的社会の方がはるかにうまくコントロールしていた。というか、人間的にしかコントロールできなかった。

進歩とは、理性により本能(感情)をコントロールすることだそうだが、この基準からしても、人間は退化している。

1トン、1500万ドルの大麻は途方もないが、それでも世界人類の命運を左右する米大統領や、1%の米国大富豪に比べるならば、まだしも人間的とはいえるであろう。



■ キルティプール南西の田園風景

(本文記事とは無関係)

谷川昌幸(C)

2012/11/15 18:18

カテゴリ: [社会](#)

タグ: [ハシシ](#), [理性](#), [麻薬](#), [本能](#)

[キルティプールのティハール](#)

今日(14日)もティハール休み。仏教の諸仏とヒンドゥーの神々との区別すらおぼつかなく、猫に小判だが、せっかくだから、午前、村を歩いてみた。

この村のすばらしいのは、通路の多くが昔ながらの赤煉瓦敷きや石畳となっていること。そこにマンダラなど祭事の美しい文様が延々と描かれていく(私には解読不能)。水瓶に花を供えたところもある。まるで異次元の世界に迷い込んだかのようだ。

村では、祭事であろうが、糲干しをしており、感心なことに、犬もお供えのお相伴に預かりながら見張りをしていた(村は犬だらけ)。バーグバイラブ寺院前では、サンカタール・サクワ(Sankhadhar Sakhwa、संखधर साख्वा)像を乗せた御輿が巡行し、礼装の少女が行列の人々に祝福を与えていた(クマリのような、そうでないような。やはり意味不明)。

この祭りがいかにも祭りらしいのは、あれほど手間暇かけて描かれた通路上の美しく長〜い聖なる文様が、夕方いってみると、ほとんど原形をとどめていなかったこと。いくら手間暇かけて作ったものでも、祭事が終われば、無価値となる——その対比は、非常に印象深いものだった。祭事は、本質的に非日常のものなのであろう。

それはそうだが、それでもバイクや車が、厳かに聖別されたはずの通路の美しい文様の上を、排ガスをまき散らしながら我が物顔で走りまわるのを見ると、この罰当たりめ、と思わず罵りたくなるのを禁じ得なかった。祭事が終われば無価値とはいえ、あまりにもヒドイ！

というわけで、伝統文化の中心にしながら、それが意味するものはちんぷんかんぷん、まるでわからない。手抜きではあるが、写真でご容赦願いたい。素人写真だが、祭事のありがたさは、ある程度感じ取っていただけるであろう。写真は300ピクセル程度に縮小した。







谷川昌幸(C)

2012/11/15 02:47

カテゴリ: [宗教](#), [文化](#)

タグ: [キルティプール](#), [ティハール](#), [非日常](#)

[ティハール夜景](#)

今日はティハールとかいうお祭りらしい。ネパールの宗教儀式や神様のことは、さっぱりわからないので、こんな時は写真で埋めるに限る。以下、ティハール夜景。





2012/11/14 01:37

カテゴリー: [宗教](#), [文化](#)

タグ: [ティハール](#)

[肉体文学としての「ハシシタ 奴の本性」](#)

「ハシシタ 奴の本性」(週刊朝日 10月26日号)掲載中止に関する著者の見解が発表された。佐野真一「見解とお詫び」朝日新聞出版 HP(2012-11-12)。失笑、幻滅。全く話にならない。

1. 責任倫理の欠如

そもそも佐野氏には、著者としての自覚、当事者意識が希薄だ。朝日側が何を言おうが、「ハシタ 奴の本性」は佐野氏の名前で発表された佐野氏自身の作品である。「ハシタ」を「奴の本性」と見事喝破されたのだから、その論理からしても、「ハシタ 奴の本性」という作品は、Author たる佐野氏の本性の発現と考えるほかあるまい。だとしたら、当然、**自分の名を冠した作品の第一の責任は朝日にではなく自分にある**、と堂々と宣言されるべきであった。それが作家たるものの矜持であろう。

ところが、佐野氏はそうはされなかった。今後、佐野氏がどのような作品を発表されようが、読者は「どうせ誰かに書かせたのだでしょ」と、疑ってかかる。著者には、自分の名を冠した作品に対する第一の責任がある。著者としての「責任倫理」を自覚せず、作品に対する「結果責任」をとらない作家は、誰からも信用されないだろう。

2. 肉体文学: 作品性の欠如

第二の問題は、佐野氏は「配慮を欠いたこと」を反省されているが、これは世間への配慮の問題ではない。佐野氏には、作品を書くということへの理解が根本的に欠如している。

いま手元にないので詳しくは引証できないが、「ハシタ 奴の本性」は、丸山眞男のいう「肉体文学」にほかならない。

フィクションはいうまでもなく、ノンフィクションも、作者が生素材を加工して作り出す「作品」である。取材した素材を生のままさらけ出すのは、クソ実証主義であり、作品性のない単なる「肉体文学」であるにすぎない。

佐野氏は、「取材の自由は保障されなければなりません」などと繰り返言をいっているが、それは当然のことであって、いまさら言われるまでもないことだ。また、「まさに言論と表現の自由の危機です」とも述べているが、実際には、そんな高尚なことが問題になっているのでもない。問題の核心は、取材した素材が生煮えで、作品化されていないということなのだ。

もし作家が佐野氏の反省に習い、世間や権力に配慮し書くべきことを書かなかったり、筆を曲げてしまったりは、作家失格である。佐野氏は「慎重な上にも慎重な記述を心がけます」などと、誰かに書かされたかのようなことも書いておられるが、作家にはそのような世間を意識した「慎重さ」など、全く不要である。書くべきことを自由に書けばよい。

ただし、そこでは当然、事柄の真実に迫る、換言するなら、作品としての完成を目指す、という内在的規範が厳しく作家を規制する。素材をそのままさらけ出す安易低俗な肉体文学ではなく、素材を徹底的に吟味し事柄の本質に迫る本物のフィクション、本物のノンフィクションこそが作家の目標でなければならないのである。

3. 結果責任の欠如

佐野氏の取材の自由は誰も制限しないし、すべきでもない。また、作品を書くに当たって、佐野氏は世間に配慮や遠慮をする必要はないし、すべきでもない。ただただお願ひしたいのは、作品としての完成度を高めること、そして、それでももし不十分として批判されたら、「配慮を欠いた」などといった無様な言い訳をせず、潔く力不足を認め、作家としての責任倫理に基づき、結果責任を堂々と果たして行かれることである。

「ハシタ 奴の本性」——それは断じて世間への「配慮」や「慎重さ」の問題ではなく、ノンフィクションとしての作品自体の質の問題である。

[参照]

2012/10/23 [ゴシップで売る朝日と佐野眞一氏の名前](#)

2012/10/22 [佐野氏の執筆責任放棄と朝日の表紙かくし](#)

2012/10/21 [朝日と佐野氏の優生思想:「ハシタ 奴の本性」の危険性](#)



■ 週刊朝日表紙

[参考資料]

見解とお詫び

報道と人権委員会の厳しい評価と重い処分が出たことを深刻に受け止めています。この件に関する私の意見を申し述べたいと思います。

まず初回で連載打ち切りの事態になり、日本維新の会代表の橋下徹氏を通じて現在の未曾有の政治的停滞状況と言論の置かれた危機的状況を描きたいという筆者の真意が読者の皆様にお伝えできなかったことが残念でなりません。人物評伝を書く場合、私には鉄則があります。テーマとする人物の思想や言動は、言うまでもなく突然生まれたわけではありません。

生まれ育った環境や、文化的歴史的な背景を取材し、その成果を書き込まなくては当該の人物を等身大に描いたとはいえ、ひいては読者の理解を得ることもできない。それが私の考える人物評伝の鉄則です。ましてや公党の代表である公人中の公人を描く場合、その人物が生まれ育った背景を調べるため、家族の歴史を過去に遡って取材することは、自分に課したいわば私の信念です。

取材で得た事実をすべて書くわけではありませんが、取材の自由は保障されなければなりません。それが許されなければ、まさに言論と表現の自由の危機です。

こうした手法を取るのには、当該の人物を歴史の中に正確にポジショニングして描くためであって、差別や身分制度を助長する考えは毛頭ありません。

しかしながら、ハシシタというタイトルが、不本意にも橋下氏の出自と人格を安易に結び付ける印象を与えてしまい、関係各位にご迷惑をかけてしまいました。

人権や差別に対する配慮が足りなかったという報道と人権委員会のご指摘は、真摯に受け止めます。また記述や表現に慎重さを欠いた点は認めざるを得ません。

出主にふれることが差別意識と直結することは絶対あってはならないことです。差別に苦しめられながら、懸命に生きてきた心から尊敬できる人は数多くいます。

そのことが重々わかっていたつもりだったにもかかわらず、それら心ある人たちのひたむきな努力や痛みを思いを致せない結果となってしまいました。

私の至らなかった最大の点は、現実には差別に苦しんでおられる方々に寄り添う深い思いと配慮を欠いたことです。その結果、それらの方々をさらなる苦しみに巻き込んでしまったことは否めません。今後はこのようなことがなきよう、慎重な上にも慎重な記述を心がけます。関係者の皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫びいたします。

2012年11月12日 佐野真一

(<http://publications2.asahi.com/3.html>)

谷川昌幸(C)

2012/11/13 02:04

カテゴリー: [文化](#)

タグ: [フィクション](#), [結果責任](#), [肉体文学](#), [責任倫理](#), [橋本徹](#), [丸山真男](#), [佐野真一](#)

[ゴビンダ冤罪批判、カトマンズポスト社説](#)

カトマンズポスト(ekantipur)が、ゴビンダ冤罪事件について、怒りの社説を書いている。

「中世的文化: ゴビンダ・マイナリは日本の旧弊司法制度の犠牲者である」(Editorial, kathmandu Post, 9 Nov)

1. 社説の要旨

ゴビンダ投獄は、「先進国ですら中世的刑事裁判制度をまだ保有している証拠である。」

日本の司法制度と警察の持つ偏見が、国際的批判を浴びている。十分な DNA 鑑定をせず、ゴビンダ氏を投獄したのはなぜか?

「もし被疑者が、貧相なネパール人ではなく、日本人、あるいは有力国国民だったら、はたしてこのような誤審となっていたであろうか。」

「15年後にもなって DNA 鑑定結果が示され、ようやく彼は釈放されたのだ。」

「結局、無実の人間が15年間も日本の刑務所に投獄され、そこで、彼の訴えによれば、日本の警察により繰り返し拷問(torture)され続けたのである。」

2. 人権侵害と日ネ友好へのダメージ

カトマンズポスト社説の批判の多くは、日本のゴビンダ支援団が繰り返し訴え続けて

きたことだ。正論中の正論であり、ただただ恥じ入るばかりだ。ゴビンダ氏の冤罪・人権侵害が、日ネ友好に与えるダメージは計り知れない。

もちろん、収監中の受刑者を警察が拷問することは考えられないが、逮捕取調中に「行き過ぎた取り調べ」、つまり「拷問」が行われた可能性は否定できない。あるいは厳密には「拷問」とはいえなくても、被疑者が外国人の場合、厳しい取り調べを「拷問」と受け取ることは、当然、あり得る。また、たとえ刑務所収監後であっても、外国人にはそこでの生活は「拷問」と感じられる可能性は十分にある。

私も、ネパールのいくつかの拘置所や刑務所を見たことがあるが、もしそこに入れられたら、そこでの扱いは私にとっては間違いなく過酷な「拷問」である。

したがって、もしかりにゴビンダ氏の主張に一部正確でない部分があったとしても、それは日本の警察・検察・裁判所、そして日本社会が彼に対して犯した大罪に比べるならば、とるに足らないものである。誤った部分は誤りと指摘しつつも、ゴビンダ氏の日本批判そのものは甘受されなければならない。

日本人は、一方でネパール大好きといいつつも、他方では平気でネパール人差別をしてきた。たとえば、ネパール人労働者の扱いは、きちんと制度化した韓国の方が日本よりはるかに公正である。猛省し、国籍に関わりなく人権を尊重することこそが、日ネ友好の真の促進になることを肝に銘じるべきだろう。

▼2012/09/21 [ゴビンダさんの冤罪と日本社会の責任](#)



■ネパール最高裁判所

谷川昌幸(C)

2012/11/12 14:31

カテゴリ: [司法](#), [人権](#)

タグ: [ゴビンダ](#), [マイナリ](#), [再審](#), [冤罪](#)

軍事化の兆し、日ネ関係

1. 秋爛漫に水を差す陸自幹部派遣

キルティプール付近は、いま桜が満開、他に菜の花、ブーゲンビリア、ラルパテ、マリ
ーゴールド、カンナ、朝顔(といっても一日中開花)等々、百花繚乱、まるで東北の5月
のようだ。



■ラルパテ



■八

重ブーゲンビリア(?)



■稲の刈り入れと満開の桜(右端)

そんな平和で、のどかな「秋爛漫」に水を差すような、物騒なニュースを各紙が伝えている。日本政府は、カワセ・マサトシ陸将補を団長とする3人のネパール軍事訪問団を派遣した。11月8日着、10日発の3日間の訪ネだ。

2. 史上最高レベルの日本軍事訪問団

報道によれば、訪ネ軍人としては、カワセ陸将補は史上最高レベルであり、新聞やネットニュースの見出しも、勇ましい。

「日本国軍事団の異例の訪ネ」(ranabhola.blogspot,9 Nov)

「日本国安全保障チームの訪ネ」(Zeenews, 10 Nov)

「軍事協力を協議」(Himalayan Times, 7 Nov)

「日本国自衛隊幹部、首都へ」(nepalnews.com)

カワセ陸将補ら日本国陸自(陸軍)幹部は、プサン・チャンド国軍 CGS と会見し、相互軍事協力や自然災害時の人的協力について協議した。また、国軍幹部学校や国軍司令部を訪問し、各部隊の幹部とも会見した。



■ 日ネ軍人協議(Himalayan Times)

3. 米軍訪問団の訪ネ

さらに驚くべきことに、上記ヒマラヤンタイムズによれば、日本国軍事訪ネ団の翌日、やはり3日の日程で、アメリカ「近東南アジア」担当チームが訪ネ、チャンド国軍 CGS と会見し米ネ軍事協力を協議、また軍幹部学校を訪問しているのだ。

4. 日米の対ネ軍事協力作戦か？

軍事関係だから、報道はごく限られており推測せざるをえないのだが、日米軍事同盟の現状からして、日本の対ネ軍事協力・準軍事協力が日本単独で計画されるわけではない。

中国の軍事大国化、チベット問題、尖閣諸島問題などをにらみながら、日米が協力して、ネパールへの何らかの軍事的働きかけを始めたのではないかと疑わざるをえない。

5. 海外派兵への呼び水

日本では、2006年、自衛隊法が改悪され、自衛隊の海外活動が「本来任務」に格上げされた。そのための軍民協力精鋭部隊として「中央即応部隊」も設立された。「平和協力」の名目さえつけば、いまや自衛隊は世界のどこへでも、もちろんネパールへも、部隊を派遣できるのである。むろん日本独自ではなく、アメリカの下働き、あるいは尻ぬぐいとして、

ネパールへの自衛隊派遣は、2007年3月の UNMIN(国連ネパール政治ミッション)への陸自隊員6名の派遣から始まる。停戦監視のための非武装隊員派遣だったので、ネパール関係者の間では、支持こそあれ、反対はなかった。

しかし私は、これは日本の自衛隊海外派遣の本格化の呼び水になると考え、当初から反対してきた。今回の「対ネ日米軍事協力作戦」ともとれる動きは、その傍証の一つといえよう。

6. 危険な軍民協力

今回の史上最高レベルでの日ネ軍事協議において、自然災害時の人的協力が話し合われたことも、看過しえない事態だ。

ネパールではマオイスト紛争は終結し、紛争がらみでの自衛隊派遣の理由は今のところはない。ところが、自然災害は頻発し、規模もますます大きくなっている。地震でもあれば、大惨事だ。自然災害時の自衛隊派遣は、そうした事態を想定している。

ネパールの災害時に救援隊を最大限派遣するのは当然だが、自衛隊派遣には反対である。

先の UNMIN 派遣で自衛隊はネパール国軍との関係を一気に強化した。もし災害派遣が想定されるなら、平時から自衛隊とネパール国軍は関係を緊密化させ、そこには当然、民間・文民部門も深く関与する。日ネ軍民協力である。

自衛隊が、日ネ軍民協力を手がかりとしてネパールに関与していけば、自衛隊がらみの複雑な既得権益が生じ、もはやそこからは抜け出せなくなる。ネパールには、自然災害の危険は山ほどある。紛争の種もある。チベット問題も深刻だ。暗に中国の脅威をも想定しつつ自衛隊をネパールに出せば、引っ込みがつかなくなる。

ネパール関係者は、日本 ODA が大幅削減され、あせり、防衛予算に目を向け始めたのだろうが、これは禁じ手、絶対に手を出してはならない。

某大学、某々大学などは、平和貢献を名目に、自衛隊関係者やその筋の某財団などとの共同研究に前のめりだが、こんな軍民協力、軍学協力こそが、国を誤らせることになるのである。

「太って満足した豚よりも、痩せたソクラテスになりたい」 J.S. ミル

谷川昌幸(C)

2012/11/12 02:04

カテゴリ: [平和](#), [政治](#), [中国](#)

タグ: [軍民協力](#), [PKO](#), [UNMIN](#), [海外派兵](#), [中央即応連隊](#)

深夜 100M 移動、奇跡の家

昨日は、ホテルの主人に教えられ、奇跡の家を見学してきた。これは夢幻でも誤魔化しでもなく、たしかに現実起こった現象である。旧約聖書の人々も、おそらくこの種の超常現象をみて、全能の神の奇跡を信じるようになったのであろう。

キルティプールの丘から南西に歩いて 30 分くらい、山麓の美しい村に、奇跡の家はある。その家は、丘の上にあったのだが、一家が寝ている間に、100 メートルも移動してしまった。

時は 2012 年 9 月 18 日午前 1 時頃。一家が就寝中ちょっと揺れ地震かと思ったが、たいしたことはなかったなので、そのまま寝てしまった。

ところが、朝目覚めると、窓の外の景色が一変、家は丸ごと丘の上から川の近くまで 100 メートルほども滑り落ちていたのだ。

この家は、おそらく地盤ごと、比較的ゆっくりと移動したのだろう。家本体は、少し傾いているが、基礎部分の柱が一本折れ曲がっているだけで、居住部分は全く壊れていない。だから、一家は流されていることに気づかず、朝まで寝ていたのだろう。奇跡的としかいいようがない。

地理学は全くの専門外だが、この付近の地盤は不安定で、脆そうである。岩盤や岩はどこにも見あたらない。雨期の長雨で土砂の地盤がゆるみ、この大規模な地滑りとなったのだろう。

驚きながら見ていると、環境保護の専門家がやってきて、近くの自宅に招かれ、当時の状況を詳しく説明してくれた。なかなか面白い人物で、チトワンで学部卒業、スウェーデンで修士をとり、以後、環境問題に関する調査研究をやっているとのこと。釧路や名古屋にも国際会議で行ったことがあるそうだ。

彼には、この奇跡の家は地滑りの事例として保存し、研究と教育に役立てるとよいのではないかと提言した。もちろん素人の思いつきにすぎないが、ネパールでは雨期になると各地で地滑りが多発し、多くの犠牲者が出ている。この奇跡の家のあった丘の上でも、すでに地割れが広がり、近辺の家々が滑り落ちるのも時間の問題のように見えた。地滑り対策は、ネパールの人々にとっては身近な、切実な課題なのである。

そんなことを、お茶をいただきながら、2時間ほどおしゃべりし、彼の家をあとにした。その後、周辺を散策したが、これがまた非常に面白く、結局、夕方まで歩き回ることになった。

そして、夕方、キルティプールの丘に戻ると、大勢の村人が出て、祭り*が始まっていた。楽隊を仕立て、踊りながら、村中を巡る。これも興味深く、昨日は、結局、朝から晩まで、遊び回ることになってしまった。

[*注]これは新しい「バーグバイラブ」の寺院奉納。在住邦人の方に教えていただいた。多謝。

●地滑り現場



■遠景。丸印が家。手前はブランコ



■遠景。下の家は上の家の隣、同じ平面にあった。



■地滑り斜面。家裏より。



■家。左手より。



■家。右手より。

[追加]豆腐のような丘？(2012-11-11)

昨日からホテルの下、キルティプールの丘の立ち上がる際のところを、ブルドーザーで掘り始めた。校舎を新築するらしい。驚いたのは、いくら掘っても大きな岩や岩盤は全く出てこないこと。畑のような土ばかり。だから、何の苦もなく見る見るうちに丘の斜面は削り取られ平地ができた。キルティプールの丘は堅固な岩盤だとホテル主人は自慢しているが、本当だろうか？もう少し掘り進めば固い岩盤があるのかもしれないが、造成現場を見る限り土砂の堆積にすぎない。いわば豆腐の上に家を建てているようなもの。大丈夫かな？



■建設現場を見る関係者



■コマツ・ブルで斜面切除。上は昔からの小学校。

谷川昌幸(C)

2012/11/10 10:41

カテゴリー: [社会](#), [文化](#)

タグ: [災害](#), [環境保護](#), [地理](#), [地質](#), [地滑り](#)

[ルンビニ開発、了解覚書に署名・成立](#)

中国主導のルンビニ開発計画の了解覚書(MoU)が11月7日、署名・成立した。中国側はAPECF(アジア太平洋相互協力基金)、ネパール側はLDSC(ルンビニ開発調整委員会)[ないしLDNDC=ルンビニ開発国家指導委員会]。LDSC議長はいうまでもなく、プラチャンダ(プスパカマル・ダハール)統一共産党毛沢東派(UCPN-M)議長だ。

▼[ルンビニ開発](#)

計画では、ルンビニ国際平和都市建設に 30 億ドル投資する予定。途方もない大計画だが、政治的にも経済的にも成算はありそうだ。

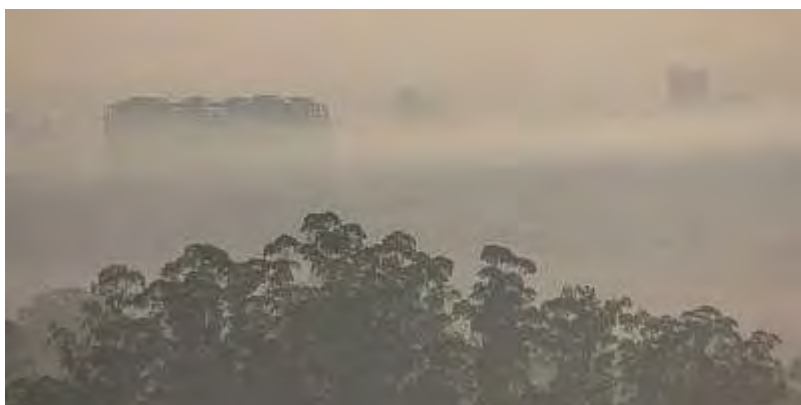
政治的には、中国と、この開発計画に深く関与している米国で、インドを牽制する意味合いがある。

国際政治は複雑怪奇で、米国は中国と対立しつつも、対印では手を結ぶ。一方、対中では、米国はインドと組む。そして、そこにプラチャンダのネパールが利用されつつ、漁夫の利をねらう。おそらく各国情報機関も関与しているであろう。素人にはうかがい知れない、国際政治の伏魔殿である。

経済的には、投資が始まれば、将来性は甚大だ。ルンビニ付近は、開発余地が十二分にあり、隣にインドの巨大人口・巨大市場、中国とも道路と鉄道とで結ぶ計画がある。ここに国際空港ができると、チトワン、ポカラも含め、一大観光地、巨大商工業地が出来上がる。

そこに目をつけた中国は、さすが抜け目がない。成功すれば、プラチャンダも大富豪となり、マオイスト革命などきれいさっぱり忘却してしまうだろう。

しかし、問題はインド。国境沿いの、目と鼻の先に、中国・米国のなにやら怪しげな機関も関与していると噂の開発計画を黙認するかどうか？ その気になれば、インドはいつでもこんな計画など、ぶち壊すことができるだろう。



■朝霧に浮かぶ摩天楼。カトマンズ開発も急ピッチ。

谷川昌幸(C)

2012/11/09 10:30

カテゴリ: [経済](#), [外交](#), [中国](#)

タグ: [ルンビニ](#), [Prachanda](#), [国際平和都市](#)

チョバールの丘*: 古き良き農村

昨日は面白かった。むろん無責任な外人観光客の勝手な感傷に過ぎないが、事実、私自身、一観光客にすぎないのだから許されるだろう。世間で、文化人類学者は先住民を調査し、見たいことをみ、聞きたいことを聞き、得意満面で「発見」を発表する、と揶揄されるのと、五十歩百歩だ。

●チョバールの丘

キルティプールから徒歩で 30 分くらいのところに、同じくらいの高さの小さな丘がある。「チョバールの丘*」とでも呼ぶのだろうか。昼食後、ちょっと散歩のつもりで出かけたら、これがなかなか面白い。結局、夕方まで遊びほうけてしまった。

[* 訂正]当初「チャンパデビの丘とでも呼ぶのだろうか」と書いたが、この丘は「チョバール丘」とのころ。観光地図では「Chobhar」。在住邦人の方に教えていただいた。多謝。

1. ヒマラヤ絶景

この時期、キルティプールの丘からも、連日、ヒマラヤがよく見える。朝は、目覚めると、ベッドの上からヒマラヤ連山を拝し、夕は、ヒマラヤの日没を眺めながら夕食をとる。贅沢この上ない毎日だ。

ところが、チョバールの丘に登ると、ほんのわずかの距離なのに、ヒマラヤが何倍もの迫力で迫ってくる。信じられない。

たしかに登山では、峠を一つ越えると、景色が一変することはある。しかし、ここからヒマラヤ連山ははるか遠い。それなのに、ほんのわずか移動しただけで、こんなに見える方が変わる。驚き、いたく感動した。

この写真は、安物のカメラで適当に撮ったものだが、それでもヒマラヤの迫力は十分に感じ取れるだろう。写真は 400 ピクセル程度に縮小してある(以下同様)。



■ランタン(チョバールの丘より)

2. 花盛り

チョバールの丘は、11月だというのに花盛り。ブーゲンビリア、マリーゴールド、ラルパテ、カンナ(のような花)、その他、名も知らぬ花々が咲き乱れている。そして、特記すべきは、菜の花(からし菜かもしれない)。

菜の花は、私の古き良き少年時代、あの夢のように幸せだった頃の原風景である。菜の花畑をみると、つい涙しそうになるほどだ。

その菜の花が、11月だというのに、チョバールの丘では、畑一面に咲いているではないか！古き良き時代の、春霞のわが村の風景とそっくりだ。その歓喜は、安物カメラでは到底表現しきれないが、それでも一部は感じ取っていただけるだろう。



■菜の花畑、遠景はガネシュ

3. 美しい民家

ヒマラヤと花々に自然にとけ込んでいるのが、伝統的な造りの民家。キルティプールの丘の民家も古いものが多いが、密集していて、どちらかという中世小都市の趣がある。

ところが、チョバールの丘の家々は、適度に離れていて、村の趣が強い。しかも、古いにもかかわらず、手入れが行き届き、美しい家が多い。これには感心した。



■丘の中腹の民家



■丘の麓の民家

4. 素朴な村人

都市からの観光客は、素朴な農民を期待するが、チョバルの丘には、そのような感

じの村人が多い。キルティプールの丘の人々は、ちょっと小難しい感じの人が多いが、同じネワールのはずなのに、こちらの人々はたいへん愛想がよい。

都市的な造りのキルティプールと村的な造りのチョバールの、居住環境の違いからくるものだろうか？ 文化人類学者になって、この思い込みを、村人たちからの聞き取り調査で「実証」してみると、面白いかもしれない。

[補足]チョバールの丘は畑が多く、外部からバフン、チェットリ、タマンなど様々な人が移住してきている。相対的に民族／ジャーティが多いことも、開放的と感じる理由かもしれない。



■ 通路で粃干し(チャンパデビ)

5. 愛想のよいマオイスト

チョバールの丘を歩いていると、愛想のよい中年男性が、日本から来たのかと話しかけてきて、あれが自分の家だ、寄っていかないか、と誘われた。見ると、その家は古い造りだが、よく手入れされていて、ちょっと見物したくなった。

そこで、言葉に甘えて、家の軒先に座り(古い民家の軒先には腰掛けて話す場所が作られている)、話を聞いた。

すると、驚いたことに、彼はマオイスト中央委員会委員で、バグルン出身。数年前、この家を買って、ここからカトマンズ市内に通い、党活動をしているとのこと。もちろん、ネパールではない。

私がよほどマオイスト好きと見えたのか、彼は、プラチャンダ議長やバブラム・バタライ首相のことをあれこれ話してくれた。また、彼自身についても、バグルンやカトマンズで幾度も逮捕され、拷問されたことなど、詳しく話してくれた。

しかし、感心なことに、そんな厳しい闘争を経験したにもかかわらず、彼には陰のようなものは全くなく、快活な明るい人物であった。マオイストのことが知りたかったらいつでも訪ねてくれ、と言ってくれたので、メールで連絡することにし、彼の家をあとにした。マオイストですら、この丘では、愛想よくなるらしい。

6. 変化の兆し

無責任な外人観光客としては残念なことだが、そのチョパール山の丘にも、邪悪な近現代文明の波が押し寄せてきている。

諸悪の根源は、車とテレビ。寺院のある丘の頂上まで道ができ、車やバイクが登ってくる。村人が、下の水田で収穫した米やジャガイモを袋に入れ背負って急坂を喘ぎ喘ぎ運び上げているのに、それを蹴散らし成金都会人が車やバイクで排ガスを吐きつつ駆けのぼる。この不条理、罰当たり！

また、TV。西洋やインドの俗悪番組が、村の神聖な寺院のそばでも見られている。子供たちから急激に俗物化し、伝統文化は失われていくだろう。

繰り返すが、以上はもちろん「素朴な農民」を期待する外人観光客の勝手な願望である。私自身、日本三大秘境の一つの出身だから、よそ者の勝手な「思い込み」や好奇心が村住民の感情をいたく傷つけることは、よくわかっている。

が、それはたしかにそうだが、私もここでは外人観光客の一人に過ぎないから、どうしても「古き良きネパール」を期待してしまう。どうしようもない。

せめて、できるだけ謙虚に振る舞い、よそ者として嫌われないよう努力する以外に方法はあるまい。因果なものだ。

谷川昌幸(C)

カテゴリー: [社会](#), [文化](#), [旅行](#), [民族](#)

タグ: [キルティプール](#), [テヤンパデビ](#), [ネワール](#), [農村](#), [近代化](#), [伝統](#)

信号機、ほぼ全滅(1):アメリカンクラブ前

幾度か議論してきたが、ネパールに来るたびに、ロータリー文化と信号機文化の原理的対立に注目せざるをえない。

▼[信号機文化](#)

カトマンズの交通信号機は、見た限りでは、ほぼ全滅。スタジアム前やカリマティのような大きな交差点でも、信号は消えていた。

「定点観測地」の旧文部省・アメリカンクラブ前の日本援助信号機も点灯の気配はない。ここは、観光客にとっては、ネパールでもっとも危険なところといってもよい。車ではなく、なにやら怪しい「アメリカンクラブ」だ。カメラを向けようものなら、警備兵に射殺されるか、逮捕されてしまう。くれぐれもご用心！

この旧文部省・アメリカンクラブ前の交差点に日本援助のハイテク信号機が設置され、赤黄青と機械的・規則的に点灯していたときは、大渋滞が日常化していた。しばらくして、赤点滅となったが、こんな中途半端な信号など誰も守りはしない。

そこで交差点の中央に小型ロータリーが設置された。点滅信号とロータリーの2原理併存でさらにややこしくなり、ますます信号はじゃまになった。そこで、完全に消灯してしまったというわけだろう。

昔からあった品格のある立派なロータリーを撤去し、日本援助で華々しくハイテク信号機を設置したのに、完全に元戻り。新設小型ロータリーは貧相だし、消灯信号機は木偶の坊、見苦しく無様なだけだ。切り倒して完全撤去した方がよい。

もう一つの「定点観測地」タパタリ交差点についても、いずれ見学し、報告したい。



■旧文部省前消灯信号機



■新設ロータリーと消灯信号機



■アメリカンクラブ(撮影厳禁) [Google]

(注)ネパールでも、いずれロータリーでは対応しきれない事態になるだろうが、見る限りでは、市内信号機はまだ時期尚早ということのようだ。

谷川昌幸(C)

2012/11/07 14:32

カテゴリ: [社会](#), [経済](#), [文化](#)

タグ: [アメリカンクラブ](#), [ロータリー](#), [援助](#), [信号](#)

米作と手織り絨毯

1. 米の収穫

キルティプールはいま、米の収穫の最盛期。周囲の水田で稲を刈り取り、人力脱穀、粃をザルに入れ選別し、風で藁くずを取り除き、集めた粃を袋に入れ、担いで丘の上まで運び上げる。そして自宅前の通路や寺院の広場にゴザを敷き、粃を広げ、乾燥させる。

すべて人力。粃袋を担ぎ上げる重労働は男性もやっているが、粃の乾燥はたいてい女性。陽が当たるように粃をかき混ぜ、寄ってくる雀や鳩や鶏を追い払う。のどかだが、これも忍耐のいる作業だ。

日本の米作も、高度成長以前は、これに近い作業だった。子供の頃、手伝ったので、その厳しさは実感としてよくわかる。ネパールでいただくご飯は、こうして作られたお米なのだ。一粒たりとも、徒やおろそかにしてはなるまい。



■ 寺院前広場で粃の乾燥

2. 手織り絨毯

米作の一方、キルティプールでは、手織り絨毯や手織り布が作られている。道路沿いに、手織り絨毯作業場があったので、窓からのぞかせてもらった。

そこでは女性が3人、上下の縦糸に、柄を織り出す様々な色の横糸を手で組み込み、槌でたたいて固めていた。紙に描かれた図柄指示を見ながら、色系を選び、縦糸に絡ませる。たいへんな根気と体力のいる作業だ。

私も、ネパール手織り絨毯を数枚持っている。それらも、女性たちのこうした重労働により製造されたものなのだ。これまでも大切に使ってきたが、さらに大切にしたい。



■土間の手織り織機



■手織り絨毯作業場(記事とは別の作業場)

3. 身体労働と頭脳労働

それにしても、米にせよ絨毯にせよ、人々が自分の身体を動かし手間暇かけて作ったものの価格は、なぜこれほど安いのだろうか？ ものの価値は労働により生み出されるのであれば、機械で作る工業製品など、もっと安くてよいはずだ。そもそも身体(肉体)労働が頭脳労働よりも評価が低いのは、なぜなのだろうか？

額に汗して作られる米や野菜、絨毯や布地よりも、ディスプレイを見ながらキーボードで打ち込む記号の方が高く評価される。これはやはり異常だ。そろそろ自然に帰らねば、人間は理性肥大により滅びてしまうだろう。

谷川昌幸(C)

2012/11/06 19:44

カテゴリー: [社会](#), [経済](#)

タグ: [農業](#), [労働](#), [工業](#), [手工業](#)

伝統農法と電力の自給自足:シュールなネパール

日本は柔らかい全体主義、電力も水道も地域独占となっている。福島原発事故で発電分離が叫ばれているが、自由化は難しいであろう。

これと対照的に、ネパールは自由競争の国。電力も水も自由に調達してよく、自給自足が進行している。

水は、水道不足分を給水タンクローリーから買ったり、町の水商売屋さんから買う。水は普通の商品の一つとして自由に取引されている。

電力も、自主独立のネパール人はお上依存から脱却している。まかなえるだけの余裕のある人や企業は、それぞれ自家発電装置を備え、停電時には必要なだけ発電して使用する。

ネパールが電力自由化超先進国であることを実感させられるのは、最近めざましい高層マンション建設。カトマンズ盆地のあちこちにニョキニョキと建ち始めた。

周囲の水田では農民が昔ながらの農法で稲作をしている。手で稲を刈り、人力脱穀機で脱穀し、自然の風を利用し米を選別している。その背後には、高層ビル群。この超現実的な、シュールな風景のあまりのコントラストに目がくらくらするほどだ。



■ 稲刈りと高層マンション



■ 人力脱穀と風利用粃選別

こんなところに、こんな高層ビルを建てて本当に大丈夫なのか？ 停電になったらエレベーターも水も止まり、生活できないではないか？

友人に聞くと、心配ないという。高層ビルはそれぞれ自給自足であり、イザというときには自前の電力と水で十分生活できるのだそうだ。

自給自足の前近代的農民のとなりに、自給自足の世界最先端未来型高層マンション。国家依存の近代を超克して勇猛果敢に前進するネパール！ 自生的秩序とは、こんなものなのか？

谷川昌幸(C)

2012/11/05 12:31

カテゴリ: [社会](#), [経済](#)

タグ: [自生的秩序](#), [自由化](#), [電力](#), [農業](#), [近代](#), [近代以後](#), [前近代](#)

民族紛争、宗教紛争へ転化か？

トリチャンドラ校の向かいのイスラム教礼拝所を見てきた。この礼拝所は、年々大きく美しくなり、いまや堂々たる巨大礼拝所だ。

外から見物しただけだが、信者が次々と訪れ、礼拝している。ものすごい数だ。みな礼儀正しく、嫌がられるわけでも叱られるわけでもない。

この付近、バグバザールでは、ムスリムが目立つようになった。ムスリム人口が増えていることは知っていたが、これほどとは思わなかった。



■トリチャンドラ校向かいのイスラム教礼拝所

イスラム教は、本来、寛容な宗教だが、弾圧されれば、やむなく抵抗せざるをえない。この礼拝所の前でも、2011年、ムスリム協会書記長が白昼、暗殺された。襲撃犯捜査要求デモが繰り返し行われたが、結局、うやむや。どこまで真剣に捜査したのか疑わしい。

■ [イスラム協会書記長、暗殺される](#)

■ [イスラム教](#)

襲撃がどの勢力によるものにせよ、このような行為は宗教対立を激化させるだけであり、どの宗教の利益にもならない。そのようなことは理性ではわかっている、いざ信仰となると、後先考えずに、このような短絡的行為に走ってしまう。情念に深く関わる宗教の難しい所以である。

人民戦争後の体制変革は、宗教間の寛容を拡大するどころか、逆に、ヒन्दウー教・イスラム教・キリスト教の間の緊張を高めることになってしまった。信徒急増のキリスト教とヒन्दウー教の関係も危うくなってきている。一触即発といっても言い過ぎではない。

人民戦争により激化した民族／ジャーティ対立が、泥沼の宗教対立に転化することのないよう切に願っている。



■ キルティプールの丘の下のメソジスト教

会

[追加1]キルティプールの丘の上のキリスト教協会(2012-11-10)

上掲のメソジスト教会は、丘の下の新興住宅地にあるが、この協会(2000年設立)は丘の上、村の中にある。教会そのものではなく、「協会」のようだが、それでも看板と屋上に十字架を掲げ、キリスト教関連施設であることは、明白だ。共同体意識の強いはずのキルティプールの、どのように見られ、どのような活動をしているのだろうか？ 気になるところだ。



[追加 2]「エベレスト子供の家」事件 (2012-11-10)

リパブリカ(11月10日)が大きく報道したところによると、先週、ポカラの郡子供福祉委員会が、「エベレスト子供の家(Everest Children's Home)」を調査し、8人の子供を救出した。両親が健在なのに、子供を収容し、キリスト教に改宗させていたという。

このような事例は、このところ無数にある。難しいのは、経済格差があるところでの救貧活動や慈善事業。宗教団体が運営すれば、布教目的と取られるし、世俗団体であっても、たとえば派遣スタッフが英語を使っておれば、母語を奪い英語化することが目的(英語帝国主義)ととられる。

特に宗教に関しては、キリスト教が危険視されている。たとえば、大統領や首相がキリスト教に改宗したら、どうなるか？あるいは、プラチャンダ議長がキリスト教徒だったら、マオイストはどうするか？

憲法によれば、国家元首や首相や政党党首がどのような宗教であれ、何ら問題はない。しかし、現実には、そうはいかない。

プラチャンダ党首は、早い段階から、ヒンドゥー教儀式には出席していない。政教分離の原則に従っているからだろうが、一部には、プラチャンダ議長はキリスト教に改宗したからだという声もある。まさかとは思うが、豪傑プラチャンダ氏なら、そのくらいのことはやってのけるかもしれない。

谷川昌幸(C)

2012/11/04 13:09

カテゴリ: [宗教](#)

タグ: [イスラム教](#), [キリスト教](#), [ヒンドゥー教](#), [宗教紛争](#), [寛容](#), [布教](#), [改宗](#)

[中央法学図書館の選書センス](#)

トリチャンドラ校の中央法学図書館(Central Law Library)を見学してきた。

ネパールの図書館や文書館は、たいてい雑然としていて埃だらけ、どの本がどこにあるのやら見当もつかないのが普通だが、この図書館は建物は古いものの、掃除が行き届き、ゴミひとつない。署名し、荷物を預けさえすれば、誰でも利用できる。



■ 中央法学図書館

蔵書は、規模の割にはよく揃っている。法理論、法哲学、憲法、民法、刑法、国際法、判例集、政治理論、政治哲学、ネパール政治、民主主義、平和学、国際関係など。レベルは高く、院生、研究者向け。

選書センスは非常によい。日本の自治体図書館は、一般に選書が悪く、きわもの、ゴミ本が多い。本棚をみると、日本人の知的レベルを疑われ、恥じ入るばかりだ。自治体図書館はネパールに視察団を送り、選書方法を学ぶべきである。

本揃えを見ていると、当然ながら、インド法が圧倒的に多く、次に英米法。日本はいうまでもなく、独仏もほとんどない。

法は、本来、市民の自由と権利を守るためのものだが、多くの場合、逆に支配の道具として悪用されている。法を作るものが、法を使って支配する。

インドや英米が、その法学の力によりネパール法学に深い影響を与えていることは明白であり、これは要するにネパールの基本構造をこれらの国が自然な形で規定しているということだ。

インド・英米の知的ヘゲモニー。まさしく、知は力なり、である。

谷川昌幸(C)

2012/11/03 13:32

カテゴリ: [インド](#), [憲法](#), [教育](#)

タグ: [知的ヘゲモニー](#), [図書館](#), [法学](#)

[本格予算案、政府が強行準備](#)

日本と同様、ネパールでも予算を巡り、政治が行き詰まり、先が見えなくなってきた。ekantipur(31 Oct)記事は、次のように述べている。

ネパールでは、予算を審議・可決すべき議会在任期中で消滅してしまい、現在は無議会政治。次善の策たる全党合意もほとんど絶望的。

この状況で3ヶ月の現行暫定予算の期限が、11月15日に切れてしまう。そこで、切羽詰まったマオイスト主導政府は、政府が本格予算案を作り、ヤダブ大統領の認証をえて、これを11月16日から施行するつもりだという。

アグニ・サブコタ UCPN 報道担当:「10月31日予定の諸党幹部会議で合意が得られなくても、政府は本格予算を準備し大統領に提出する予定だ。」

マオイスト政府は、この政府予算案を大統領は認証せざるをえない、と考えている。たしかに、通常であれば、その通りだが、今回は議会可決がない。全党合意もない。その意味では、大統領には予算案認証拒否の正当な理由があるといえよう。

もし大統領が kongress 党や UML の圧力により政府予算案を拒否すると、金欠により政府崩壊、あるいは大統領によるバブラム・バタライ首相解任という事態になる。いずれも、憲法上やってやれないことはないが、もしこの大統領「大権」を行使すれば、大統領は 1990 年憲法の国王に限りなく近づく。大統領の独裁である。

この可能性にたいし、サブコタ UCPN 報道担当は、「もしそのような事態になれば、人民に訴え人民による問題解決を目指す」と警告している。「人民運動」再開である。

マオイスト政府には、切実な事情がある。政府は、UNMIN 登録後の資格非認定戦闘員に対し、一人当たり 20 万ルピーを給付する約束をしている。マーティン元 UNMIN 代表*によれば、約 31000 人が戦闘員登録申請し、その約 40% が審査により無資格とされ、最終的に 19602 人が人民解放軍戦闘員として認定された。これ以外の、給付金 20 万ルピーの対象たる非認定戦闘員がどの範囲か、定かではないが、計算上、相当額になることは間違いない。本格予算が通らなければ、到底支給できない。(なお、人民解放軍正規除隊者 13922 人には、一人当たり 50~80 万ルピーの給付金の支払いがほぼ完了している。)[資格非認定戦闘員は約 4000 人。Republica, 5 Nov]

* Martin, Ian, "The United Nations and Support to Nepal's Peace Process: The Role of the UN Mission in Nepal," Eisiedel, von S., D.M. Malone & S. Pradhan ed., *Nepal in Transition*, Cambridge UP, 2012, pp.201-231.

アメリカ独立革命が同意なき課税への抵抗から始まったように、予算作成・課税徴収・予算執行は、民主主義国家の基礎である。もし議会なし・全党合意なしで予算案が通るなら、どう言い訳をするにせよ、それは独裁政治である。民主主義の形骸を持つだけ、国王独裁よりたちが悪い。

予算の面でも、ネパール政治と日本政治は近接してきた。もともと、当面は、天皇制廃止とはならないだろうが。



■ラトナ公園バス停前

谷川昌幸(C)

2012/11/02 13:11

カテゴリー: [マオイスト](#), [経済](#), [民主主義](#)

タグ: [独裁](#), [課税](#), [専制](#), [予算](#), [人民解放軍](#)